

9月



撮影：2013年4月（新潟県新潟市 新川右岸）



あの日のあの川 リレー日記 ～第32話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第32話主人公 岸田まりな

（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川（直）研究室『川と人』ゼミ）

（■川ガール・□川系男子）

（出身地を流れる川：茨城県小貝川、利根川）

「新潟4年間」

いつのこと？： 大学

どこの川？： 新川、信濃川

川を研究対象として見るようになってから半年ほど経つ。それまでは当然そこにあるもので、特に意識を向けるものではなかった。イメージとしては道路と同じ。いろいろなところにある。必要だけど、とりわけ観察対象になることはない。そういう意識だった。

小学校の校歌にも「利根と小貝に恵まれて」と出てくるように、幼いころから川のある環境で育った。もっとも、小学生の頃は歌詞の意味を理解していないばかりか漢字にさえ直せていなかった。「利根と小貝に」が「『とねとこ』買いに」だと思っていた。「とねとこ」は近くにあった保育園の名前に似ていたので、その保育園を思い浮かべながら歌っていた。これほどデタラメな意味のまま、よく6年間も歌い続けたものだ。今振り返ればかわいい頃も自分にはあったのだと思う。

そんな故郷を離れて独り立ちに片足をかけたのが大学入学だ。新潟で住むと決めたアパートの窓開けると目の前の住宅街の奥に山があった。また見下ろすと川が流れていた。10メートル以上ある崖の下に流れている新川だ。川と山と海に囲まれた土地に住みたいとひそかに思っていたので、少しワクワクしながら川を眺めていた。よく見れば見るほどに、あれ、思っていたよりも濁っていると気持ちが沈んでいった。きっと昨日雨が降ったからだろうと思っていたが、4年間一度も澄んだ水が流れるのを見ることはなかった。

新しく友達を作るのはあまり得意でなかったから、大学に入ってすぐはただ淡々と日々が過ぎていった。実家には姉妹がいたこともあり、静かな家で感じる寂しさに耐えられなかったこともある。この年になってと自

分で思いつつも、泣きながら親に電話していた。

大学にも慣れ、泣くことも親に連絡することもあまりなくなった頃にベランダで潮のにおいを感じた。目を凝らして見ると見えるほどに海が近いのだ。見える海はもちろん日本海。滅多に晴れない新潟だが、運よく夕日が沈むのを見たときには思わず写真に収めてしまった。海から新川、その周辺の家々までが夕日と同じ色に染められ、また暗く影となり綺麗なコントラストが描かれていた。忙しかったり、緊張していたりする日々の中でほっと心が和らぐ時間だった。友達関係、勉強、研究、アルバイト、恋愛・・・何か悩みがあるたびにベランダから新川を眺めた。たまに風に乗ってやってくる潮風に何度も慰められた。海とはほぼ無縁のところに住んでいたため、海が近い



撮影：2014年（新潟県新潟市 新川右岸）

ことがひたすらに嬉しかった。同時に悲しいこともあった。中学の時から大事に使ってきたお気に入りの自転車は潮風で錆びてしまった。何かを得る時には何かを失う。そんなセリフをどこかで読んだ気がする。

川の両岸には小さな漁船が所狭しと並んでいる。いつだったか、河口がどうなっているのか気になって散策しに行ったことがある。コンクリートで固められた河口から船が海へと出発していく様子が見られる。小さい船が小さい河口から大きな海へ旅立っていく様子は勇ましかった。漁師さんには失礼ながら、ひっくり返ってしまうのではないかとヒヤヒヤしながら見ていた。この船が川を走っているのは、早起きして散歩していると見ることができる。小さい船がブオーと音を立て、水しぶきを上げながら明け方の海に走っていく様子はなかなかかわいらしい。そして船に立っているおじちゃんもついでにかわいらしく見える。

また利根と小貝の茨城に戻ってきてからは海のおいがる川も漁船もご無沙汰になってしまった。

もう一つ、信濃川の大河津分水路にまつわる思い出がある。内閣府のプログラムで大学2年の夏に海外派遣され、その事後活動組織の全国大会が新潟で行われた。全国大会では各都道府県の事後活動報告のほか、開催県に関する分科会がある。団体に所属してから2年ほどの新米だったが、全国大会の実行委員長を務めることになり、分科会の一つとして大河津分水路を選んだ。

新潟では昔、川の氾濫が頻繁に起こっていた。米どころであるから洪水は住居だけでなく農業の面から考えても甚大な被害となる。そのため、川の右岸側か左岸側の堤防を意図的に切って一方の地域を守ったそうだ。どちらの堤防を切るかを決めるのは凧合戦だった。「三条六角」という言葉が有名であるように六角形の凧が燕三条の凧である。余談だが、地元の方々は「凧」と書いて「イカ」と読む。凧の文化が発達したのは洪水のせいであるが、洪水自体は望ましいものではない。これを根本的に解決したのが大河津分水路だとのことだった。信濃川を途中で分岐させ、流量を減らすことで洪水被害が起こらないようにした。

正直、最初にこの話を聞いた時にはそこまで魅力的なテーマとは思えなかった。歴史が好きな人にはいいかもしれないが、そうでない人にとっては大河津分水路のあらすじを知ったら十分であろうと思った。しかし、今考えると川が好きな人にも魅力的な分科会だったのだと分かった。そのうえ、自分がその一人になるとは思ってもいなかった。大河津資料館や魚道の観察などができた分科会に参加できなかったのは悔やまれる。実際に分科会に参加したのは20人ほどだったのだろうか。彼らは歴史好きなのか、はたまた川好きだったのか。

大学院に入ってから勉強会で大河津分水路の話題が出ると有名な構造物であったことを実感した。そしてそのたびに全国大会のことや六角凧のことを思い出す。

新潟で出会った川は、当時景色の一部でしかなかった。しかし景色と思い出が繋がっているように、川と思い出も繋がっていた。4年間は長いようで短かったが、たくさんの人と出会い、たくさんの経験をし、たくさんの思い出ができた。いつか、また新川と大河津分水路を見た時に次は何を思うだろう。

(次は今泉光華さんにバトンを託します)